スポット企画展

山田スイッチ－イラストと文章

会期：令和 8 年 7 月 8 日～令和 8 年 9 月 28 日

平川市在住のコラムニスト・イラストレーターの山田スイッチは、今年、生誕 50 年、デビュー25 年である。本展では、イラストと文章、その活動を紹介した。著書に加え、デビュー前のイラスト作品や発売前の絵本の原画などをお借りし、全面協力していただいた。

山田は、大学卒業後、お笑い芸人になるために上京。芸能事務所のネタ見せに通うもオーディションに落ち続けた。平成 13（2001）年「ぴあコラム大賞」を受賞後、帰郷。雑誌『weekly ぴあ』でコラムニストとしてデビュー。以後、地元紙に連載するなど様々な活動をしてきた。また、同居する夫の祖母を題材とした「バッチャ」シリーズも好評である。

令和 8 年 9 月には、自身の介護体験をもとに書いた大人向け絵本『よわくてもだいじょうぶ』を出版。

スポット企画展と並行して開催したロビー展示では「山田スイッチ息子たちの名言コーナー」と題し、息子たちの幼少期からの名言をイラストや色紙にして紹介した。



『うちのバッチャ』
山田スイッチ社
平成 25 年 4 月 10 日



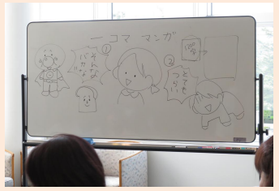
原画

絵本『よわくてもだいじょうぶ』より

開館記念無料開館　ワークショップ

郷土文学館開館を記念し、無料開館が令和 8 年 7 月 1 日（水）、4 日（土）、5 日（日）の日程で行われた。

5 日のワークショップ「一コマで伝わる！一コマ漫画の描き方！」では、山田スイッチさんを講師に迎え、一コマ漫画の描き方のコツやポイントなどを教わった。小学生から大人まで参加、各自描いた一コマ漫画を披露しあうなど楽しい時間を過ごした。



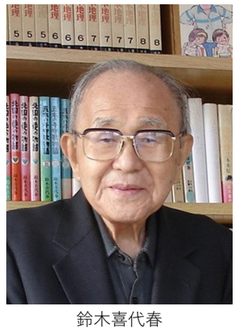


ワークショップの様子

スポット企画展

鈴木喜代春没後１０年展

会期：令和 8 年 11 月 1 日～令和 8 年 12 月 7 日



鈴木喜代春
写真提供：青森県近代文学館



『十三湖のばば』偕成社

鈴木喜代春は、大正 14 年に南津軽郡田舎館村に生まれる。昭和 27 年に刊行した、黒石小学校 4 年生の生活記録『みつばちの子』が反響を呼び、日本の生活綴方教育史に大きな足跡を残した。

昭和 29 年、喜代春は千葉県松戸市に転じて小中学校に勤務する中、子どもたちに知識だけではなく「人間」の姿を伝えようと物語教材を創作。昭和 37 年、小作農民の根源的な苦悩を背景に、懸命に生きようとする北国の子どもを描いた『北風の子』を刊行。その後も、高度経済成長のひずみである「公害」をテーマとした『二つの川』（46 年）、北辺の農村の過酷な環境の中で必死に生きる人間の姿を描いた名作『十三湖のばば』（49 年）など、次々と作品を書き続けた。

昭和 50 年代になると、学校では「偏差値絶対」の傾向が進んで「落ちこぼれ」という言葉が生まれ、子どもたちの「人間」が奪われていく。この風潮を嘆いた喜代春は、学校に「人間」を取り戻すという信念のもと、『加木九太郎校長先生』（54 年）を皮切りに、「ダメな子シリーズ」（56 年～63 年）などの〈学校もの〉を数多く書き上げた。

そのほか、伝記的作品や民話・民譚を物語にした作品も手がけ、昭和 62 年刊行の『津軽の山歌物語』は第 12 回日本児童文芸家協会賞を受賞。平成 17 年には『けがづの子 生命をつづる津軽の詩』を刊行するなど、平成 28 年に 90 歳で世を去るまで数多くの作品を書き続けた。

教育に「人間」を取り戻すという信念のもとで書き綴られた、児童文学者・鈴木喜代春の『十三湖のばば』をはじめとする代表的な作品を中心に紹介する。

スポット企画展

『鎌田慧セレクション－現代の記録－』完成記念展

会期：令和 8 年 9 月 30 日～令和 8 年 10 月 30 日



弘前市出身のルポライター・鎌田慧による、戦後日本の闇をえぐる作品から重要作品を収録した『鎌田慧セレクション－現代の記録－』(皓星社)。令和 6 年 9 月より隔月刊行され、「拾遺」として「単行本未収録文集」を加えた全 12 巻で構成される本シリーズは、冤罪事件をはじめとし、反原発運動、生産効率化に伴う労働問題、基地反対闘争など社会問題全般に深く切り込み、行動するルポライターとして最前線で取材・執筆をしてきた鎌田の集大成である。本展は、初の自選著作集となる『鎌田慧セレクション』の完成を記念し、著作や直筆の色紙などを展示するものである。

おきなわ、と独り言つとき、なにか名状し難い、悲しい、複雑な感情に囚われる。それは故郷の「あおもり」、あるいは「ひろさき」と発音する時とはちがう感情である。本州、最北端の地域ではあっても、生まれ故郷の青森には、懐かしさばかりか、お国自慢といったような感情もふくまれてある。

もちろん「おきなわ」は、沖縄の人たちにとっての故郷の懐かしさであり、プライドであり、お国自慢がある。それでもわたしたち「内地人」が沖縄というとき、うしろめたさを感じるのは何故なのだろうか。

第 11 巻『沖縄とわが旅路』あとがき〈「台湾有事」に翻弄される悲劇の島〉より

展示資料である鎌田直筆の色紙「勿軽直折剣　猶勝曲全鉤（直き折剣を軽んずなかれ　なお曲りたる全鉤に勝る）」は、ジャーナリストでありながら読売争議に関わり、反権力・反公害を展開した鈴木東民が書き記した色紙に由来する。このほか、文学賞を受賞した著作の単行本や、『椎の若葉に光あれ　葛西善蔵の生涯』の第一章「故郷」の直筆原稿などを紹介した。

鎌田慧（かまたさとし）　プロフィール

昭和 13 年、弘前市生まれ。市立朝陽小学校から市立第四中学校、県立弘前高校と進み、上京。3 年間町工場で働き、昭和 35 年早稲田大学第一文学部に入学。卒業後、新聞・雑誌記者を経てフリーライターとなる。昭和 48 年、トヨタ自動車の季節工の経験をもとに『自動車絶望工場』を発表、注目を集める。また平成 6 年に発表した『椎の若葉に光あれ　葛西善蔵の生涯』『津軽・斜陽の家』など、郷土の文人を取り上げた伝記もある。

平成 2 年『反骨　鈴木東民の生涯』で新田次郎文学賞を、平成 3 年『六ヶ所村の記録』で毎日出版文化賞を受賞。

鎌田慧×風間サチコ　『鎌田慧セレクション－現代の記録－』出版記念トーク・セッション

期日：令和 8 年 10 月 4 日（日）

会場：弘前れんが倉庫美術館展示室

主催：弘前ペンクラブ、弘前れんが倉庫美術館、弘前市立郷土文学館
協力：株式会社皓星社、弘前読書人倶楽部
後援：東奥日報社、陸奥新報社

令和 8 年 10 月 4 日、弘前市出身のルポライター・鎌田慧さんの初の自選著作集『鎌田慧セレクション－現代の記録－』（皓星社）全 12 巻の完結を記念したトークイベントが、弘前れんが倉庫美術館で開かれた。主催は、弘前ペンクラブ、弘前れんが倉庫美術館、弘前市立郷土文学館で、両館初の共催イベントとなった。

第 1 部は鎌田さんの講話。今回の著作集と、郷里・弘前についての思いが語られた。

第 2 部はトークセッション。鎌田慧、風間サチコ（現代美術家）、藤巻修一（皓星社代表）、木村絵理子（弘前れんが倉庫美術館館長）の 4 氏が登壇し、「本と展示、文学と美術」をテーマにトークが行われた。進行は世良啓さん（弘前ペンクラブ副会長）。

藤巻さんは、皓星社の「背骨」になるものを求めて鎌田さんの自選著作集を企画。新しい感覚の表紙を探していたところ、風間さんの版画作品のテーマが鎌田さんの文章と合致し、各巻の表紙デザインに起用したという。

木村さんは、弘前れんが倉庫美術館で風間さんの展覧会を開催した動機を、不安定な社会の中で生まれた風間さんの「ロマン主義」に惹かれたからだと語った。木村さんは、若い頃から早稲田大学の先輩である鎌田さんの著作を読み、東日本大震災、福島第一原発事故などの活動に注目していたが、その鎌田さんとトークに参加できたことを喜んだ。

風間さんが、東海村の原子力発電所の見学を機に、原子力発電について学ぶために初めて読んだのが鎌田さんの著作であった。自分の作品の原点には鎌田さんの文章があるとして、今回の著作集の表紙に起用されたことも、偶然ではなく「めぐり合わせ」だと語った。

鎌田さんは、会場で風間さんのダイナミックな版画作品を見て、そのエネルギーに驚いたという。自分は全国各地を歩いてひたすらルポルタージュを書いたが、風間さんは四畳半の仕事場で巨大な表現世界を創り上げていると賞賛。話題は急速に進化する AI の問題や外国人・移民に対する排外主義などの社会問題にも及び、今回のトークイベントは、これからの日本や世界の在り方を考える貴重な場となった。



トークセッションの 4 氏
左より、藤巻修一、鎌田慧、風間サチコ、木村絵理子
写真提供：弘前れんが倉庫美術館

風間（かざま）サチコ　プロフィール

昭和 47 年、東京生まれ。武蔵野美術学園版画研究科修了。「現在」起きている現象の根源を「過去」に探り、「未来」に垂れこむ暗雲を予兆させる黒い木版画を中心に制作する。古書研究など独自のリサーチを徹底し、歴史や現実の闇を彫りおこすことで真実から嘘を抉り出し、嘘から真実を描き出す。